

富田碎花旧居 開館30周年

吹き抜けた「風の人」 富田碎花

宮川町にある富田碎花旧居をご存じでしょうか。大正・昭和の詩壇に大きな功績を残した詩人・富田碎花が暮らした住居です。

富田碎花旧居は、碎花の蔵書・研究資料などとともに遺族からゆずり受け、昭和62(1987)年5月から一般公開をはじめ、今年で30周年を迎えました。

問い合わせ 生涯学習課 ☎38-2091



「風」と「兵庫県文化の父」。 ふたつのニックネーム

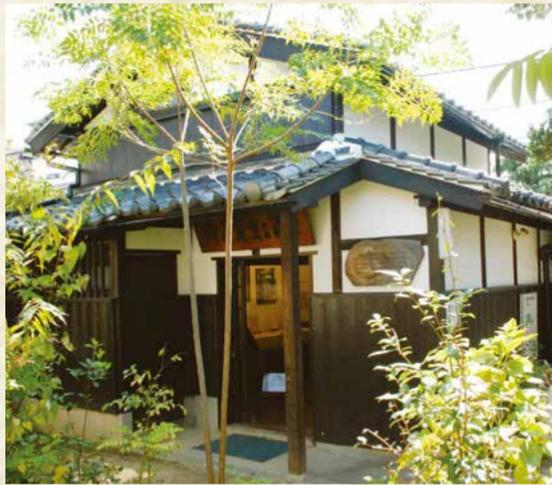
富田碎花にはふたつのニックネームがあります。「風」というニックネーム名は、全国各地を旅する姿からつけられたものです。その足跡はほぼ全国におよび、旅の写真や各地で収集した民芸品などが遺品として残されています。自身でも晩年に「ひょうひょうと風に吹かれて行くことも持って生まれた性なればこそ」と歌っています。

戦後には、50余編にのぼる校歌や市町歌を作詞しました。市内でも、精道中学校、宮川小学校、岩園小学校の校歌は碎花の作詞です。碎花は、これらを作詞する際にも、現地へ足を運んだそうです。

昭和46年(1971)に兵庫県の委嘱によって作られた『兵庫讃歌』は、摂津、淡路、播磨、丹波、但馬の5国を花びらに見立てた壮大な長編詩です。この業績が、碎花の2つ目のニックネーム「兵庫県文化の父」に結びつきます。



展示棟内の書斎机 隣の額は「全国中等野球大会」の行進歌(碎花自筆)



展示棟

あの文豪も暮らした 文学ゆかりの地

富田碎花旧居は、かつて、文豪・谷崎潤一郎が暮らした家でもあります。

大正12年(1923)に起きた関東大震災をきっかけに、阪神間へやってきた谷崎は、その後21年間に、阪神間で13回も引っ越しました。その内、昭和9年(1934)3月～昭和11年(1936)11月の間に暮らしたのが、現在の富田碎花旧居で、谷崎潤一郎の「打出(うちで)の家」と呼ばれています。

谷崎は「打出の家」で、3番目の妻となる松子と結婚式を挙げ、松子の姉妹たちとともに暮らしました。谷崎は、現在展示棟として使用している門屋の2階を書斎として、『猫と庄造と二人のをんな』の執筆や『源氏物語』の現代語訳に着手しました。

谷崎が暮らしたころの母屋は昭和20年(1945)8月の阪神大空襲によって全焼しました。そのため、当時から残るものは、現在の展示棟と、門の隣の松の木、そして庭の燈籠のみです。

碎花は、谷崎とこの家のかかわりについて「細雪 源氏の君のかかわりをわが庭に遺す 擬春日燈籠」と歌っています。

富田碎花旧居の見どころ

富田碎花旧居には、至る所に碎花の暮らした面影が残っています。

大きな魅力のひとつが庭です。庭には、四季折々さまざまな植物がのびのびと育っています。一見、手入れされていない雑多な庭に見えますが、これは碎花が、友人が持参した草木や、自然に育った植物の命を平等に大切にしたいためにできた風景です。母屋には、筆筒や掘りごたつ、縁側など、懐かしさを感じるものが残っています。碎花の作品も自由に閲覧できます。ぜひ、旧居を訪れて縁側で庭を眺め、碎花の人柄や情熱にゆっくりと触れてみてください。



富田碎花旧居母屋

富田碎花旧居のココがおすすめ!

自然と調和できる癒しスポット



精道中学校 小川登生さん

富田碎花旧居の縁側に座って、庭の草木をぼんやり眺めているだけで、居心地が良く、心が落ち着きます。



文豪たちの息吹を感じる空間



芦屋観光協会 小林繁夫さん



昭和の佇まいが残るこの場所は、心静かに文豪たちに思いを馳せることができます。

富田碎花プロフィール

明治23年(1890)、岩手県盛岡市生まれ。大正期には、民衆の生活や心を日常的な口語で表現する民衆詩派の詩人として、欧米の詩を翻訳し、大正デモクラシー期の日本に、欧米の民主主義の思想を紹介。

大正2年(1913)に肺を患い、転地療養のため、芦屋の知人宅へやってきたことをきっかけに、芦屋に移り住む。

昭和14年(1939)より、昭和59年(1984)に93歳で亡くなるまで現富田碎花旧居で暮らす。